校長便り

20210412（第4号）文責：中務公明

１　授人以魚 不如授人以漁

中国の故事を紹介する。老子の言葉。

「授人以魚 不如授人以漁」（出典：淮南子）これは、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」という意味だ。この故事は、次のようなものだ。

釣りをしている老人の所に、腹をすかせた子どもが近寄ってきた。そして「魚が欲しい」とその老人に言った。しかし、老人は魚を与えなかった。

老人は、こう言った。「もし私が魚を与えれば、あなたの空腹はとりあえず満たされるでしょう。しかし、明日また同じように空腹になってしまいます。そうならないよう、あなたに釣具を貸して、どのように魚を釣るかを教えてあげましょう。それを身に付ければ、釣り道具が壊れてなくなるまで、あなたは魚を食べていけるでしょう。しかし、釣具が壊れたら、また同じように空腹になってしまいます。だから、釣具の作り方も教えてあげましょう。そうすれば、あなたは一生食べていけるでしょう。」と。

この故事には、学校現場（授業）で大事にしたい視点が示されている。

「魚をあげること」＝「目の前の課題（魚が欲しい）の解決法（与える）を言うこと」

「釣具」＝「本当の課題を解決するための資料」

「釣具の作り方を知ること」

＝「正しい学び方（今回の場合、資料の入手法や使い方）を知ること」

小手先の方法論を伝えるのではなく、「本当に解決すべき問題」の解決方法の実践と習得方法を教えることの大切さ、また指導者の姿勢のあり方がここに示されている。

一時的な詰め込みの教育ではなく、それを学ぶことの「本当の意味」や、「目的」をしっかりと伝えることの大切さが何より大事だ。今、学んでいることが、将来にわたって役に立つ知識やスキルであることが、生きて働く「学ぶこと」、そして、その「知識やスキル」を以って、「自らの力で、答えを導き出すことができる」ようにすることが我々の仕事だということだ。

生徒指導にも同じ事が言える。「過ち」を「戒め」にするためには、自分の「律し方」や「生き方」を教えてやることだ。一番の釣具は、我々自身の姿だろう。「目の前の子どもの姿が我々の指導の答え」なのだ。それはそうなのだが･･･なかなかねぇ･･･。

２　連日のように「不祥事ニュース」が報道されているが・・・。

悲しいかな、教員による不祥事が全に連日報道されている。休日に呼び出し、教室でわいせつな写真撮影、許可なしの女子生徒とLINEやり取り、電車の不正乗車、不適切な部活指導、盗撮＆わいせつ行為･･･枚挙にいとまがない。

ニュースはその事件の真相まではわからない。その教師がどんな人であったかもわからない。勿論、犯罪行為は許せるものではないが、私の目の前の先生方は、連日子どもたちのために孤軍奮闘している。一見、報道された先生らと波岡中の先生方との距離は、果てしなく遠いように感じてしまうが、不祥事の怖さは、この距離感にある。

教師経験を重ねてくるに従い、時に子どもたちのすばらしさに感動し、自分の言動（良くも悪くも）の影響力の大きさに責任を痛感してきた。いつしか教師と言う仕事に誇りを持ち、教師であることを幸せに思うようになった。悲しいかな、そんな教師の世界でも多くの不祥事が起きる。「明日は我が身だ」と胸に刻むことだ。そして、これらの不祥事を「対岸の火事」ではなく「反面教師」として、自身を鍛え、磨き続けることが何より大切だ。大事なのはその決意と覚悟を持った姿勢で一日一日を積み重ねていくことだ。そんな姿なら、保護者も生徒も、地域の方も安心できるだろう。だから、波中の先生方、揺らぐことなくこれまでどおり元気に＆迅速に＆ていねいに＆確実にやっていきましょう！こういう記事を記す度に、「どの口が言っているのか！」という声が自分の心の中で反響する。それでも言わねばなるまい。多くのしくじりを見てきた（してきた）先輩として･･･。